

「リゼットと みどりの くつした」
カタリーナ・ファルクス作

よくはれたひに リゼットは おさんぽにいきました。

すこしあるいたところで くつしたを を見つけました。
すてきな みどりの くつしたでした。

「やったあ！」

リゼットは いいました。

「こんなに すてきな くつした めったに みつからないよ！」

リゼットは くつしたをはいて げんきよく おさんぽを つづけました。

そしてすぐに、 いじわるな トムねこと ティムねこの きょうだいに で
あいました。

ふたりは リゼットを からかうのが だいすきなのです。

「みてみて！ わたしが みつけたの！」

リゼットは じまんしました。

「ははは かたあしだけじゃないか！ ばかだなあ リゼット。もうかたほう
は どこへいったんだい？ くつしたは ふたつで ひとつなんだって しら
ないのかい？」

トムねこと ティムねこが いいました。

「たしかに そうだね。」

リゼットは いいました。

「りょうほう そろってないと だめだよ。わたし、もうかたほうを み
つけにいかないと。」

リゼットは まちでいちばんたかい きに のぼりました。

きのてっぺんからは すべてが みわたせました。

だけど、ざんねん。

リゼットが めを どれだけまんまるにしてみても、 くつしたは かげもか
たちもありません。

「そうだ！」

リゼットは おもいつきました。

「くつしたは うみに おっこちちゃったんだよ、きっと。」

リゼットは 木からおりて いそいで はまべに はしっていきました。

リゼットは つめたい みずのなかに あたまを つっこんでみました。

すると、おさかなが かおのまえを よこぎっていきました。

おさかななら なにか しているかもしれません。

「おさかなさん、 こんにちは。 くつしたを みなかった？」

「いいや みてないよ。」

おさかなは こたえました。

「でも ほらみて。 ぼく こんなにおおきいコーヒーポットと ちいさいレ
ーキを みつけたんだ！ すごいでしょ？ ぜんぶ みずのなかに おちてき
たんだよ！」

「そうだね。」

リゼットは ためいきまじりに いいました。

「でも わたしが さがしてるのは くつしたなんだけどね...。」

がっかりしたリゼットは とぼとぼと おうちへ かえりました。

おうちへかえると おかあさんが リゼットをみて いいました。

「どうして そんなに かなしいおかおを しているの？」

「くつしたを かたほうだけ みつけたの。でも かたほうだけじゃ だめな
の。くつしたは ふたつで ひとつだもん。」

「それはそうだね。」

おかあさんは いいました。

「くつしたは くつとおんなじで ふたつで ひとつだからね。ほら あらっ
てあげるから くつしたを ちょうだい。おそとで みつけたくつしたは き
たないから きれいにしてからじゃないと はいちゃだめ。」

それから リゼットは すわって くつしたがかわくのを まちました。

「あれは きみの ぼうしかな？」

だれかのこえがしました。

ふりかえってみてみると おともだちの パートでした。

「ううん、あれはね ぼうしじゃないよ。」

リゼットは いいました。

「くつしただよ。」

「ああ そうか！ まあ どっちでもいいよ。 ぼくは あんなぼうしをかぶるのが ゆめだったんだ！ ちょっと かぶってみてもいい？」

「まあ いいよ。」

パートが くつしたを かぶったのを見て、リゼットは わらいました。

「わたしの くつした あなたに すごくにあってるよ！」

すると パートは

「ほらね、これは りっぱにぼうしになるでしょ！」

といました。

リゼットも うなずきました

「うん、そうだね。 もし くつしたが、ふたつあれば かたほうあげるのにな。」

そのころ トムねことティムねこは リゼットの おうちのまわりを のびあしで あるきまわっていました。

それから おおごえでいました。

「おーい！ リゼット、みてごらん！ きみがさがしてた もうかたほうのくつしたを みつけたぞ！」

「どこで みつけたの？」

リゼットは たずねました。

けれども トムねことティムねこは こたえません。

ふたりは さっとにげながら さげびました。

「とれるもんなら とってみろ！」

リゼットとパートは おおいそぎで おいかけました。

「ふう、 あのふたり ちいさいけど なかなか はやいじゃないか。」

トムねこが はあはあしながら いました。

「でも くつしたは ぜったいに やらないぞ！」

ティムねこも いました。

そして、

「ポッチャン！」

リゼットと パートは やつとのもので トムねことティムねこに おいつきました。

そして リゼットは いました。

「さあ くつしたを ちょうだい。」

「くつしただって？ くつしたなんて もうもってないよーだ。 どこかへ
とんでいっちゃったからね。」

バートが リゼットのワンピースのそでを ひっぱっていいました。

「もういいにしようよ。トムとティムはいじわるだ。それに うそつきだよ。
くつしたが とんでいっちゃうはずがないよ。」

「こんなのひどいよ。」

リゼットは つぶやきました。

「あなたに あげるぼうしは もうなくなっちゃったね…。 でも きにいつ
てるなら わたしのを もうすこしだけ かぶっててもいいよ。おうちについ
たら かえしてくれれば いいから。」

「うれしいな。」

バートが そっと いいました。

ふたりは おうちに つきました。

そしたら ———— なんとなんと！

リゼットのおかあさんが あたらしいくつしたを あんでいたのです！

それは みどりで リゼットがみつけたくつしたに そっくりでした。

リゼットは おおよろこびで とびはねて おかあさんに だきつきました。

すると おかあさんが

「あなたも くつしたをかぶりたい？」

と ききました。

「バートと おそろいだよ！」

「もちろん！」

リゼットは めを かがやかせました。

「これで ふたりとも ぼうしが てにはいったね！」

バートは うれしくなって おどりはじめました。

ねむるじかんになって バートは おうちへかえっていきました。

リゼットは ぼうしをかぶったまま ねるつもりです。

そして バートのことを おもいました。

「バートも ぼうしをかぶったまま ねむるんだろうな、ぜったい。」

でも そのよる いちばんしあわせだったのは おさかなでした。
ちいさいレーキと おおきいコーヒーポットと それに、ここちよい みどりの
ねぶくろまで みつけたのですから。

さあ あなたも こんなすてきなくつしたを ひろえるかな...？